乙女大戦　～戦国美将伝～

暑海陽川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
乙女大戦　～戦国美将伝～

【Ｎコード】
Ｎ３０４７Ｍ

【作者名】
暑海陽川

【あらすじ】
何の変哲もない学生、菅原夏涼は、謎の少女によって「戦国時代のパラレルワールド」に来てしまった。
そこで出会う数々の美少女となった戦国武将。
夏涼はこの先どうなってしまうのか
そして元の世界に帰れるのか――

謎の少女と全ての始まり

第一章　謎の少女と全ての始まり

とある昼下がりのサンフランシスコ高峰学園。一人の少年は外を眺めていた。平凡な日常。不満もなかったが、満足もできなかった。これだけ暇だと某ハルヒのような事もしたくなってくる。そんなバカなことを考えていた。すると

「夏涼、次の教科何だっけ」

急に少年の名前を呼ばれ、少年、菅原夏涼（すがはらかりょう）は驚いて椅子から転げ落ちそうになったのを、必死にこらえる。

「なんだ木蓮（もくれん）か……驚かすな、心臓に悪い」

「あんたは何歳だ！！」

「木蓮」と夏涼に呼ばれる少女は、昔ながらのツッコミのようにジェスチャーをした。

「木蓮・・・お前いつからつっこみになった」

「いつも私がボケて夏涼がつっこむからね。一度やってみたかったんだよ」

木蓮は胸を張った。胸を張る事により、いつも無い胸がより一層あらわになり

（かわいそうに……）

と夏涼は思わざるを得なかった。しまいに夏涼は泣きだした。

「え？　……ちょっ何で泣いてんの！？　私なんかした！？　そうか……私がつっこみなのは納得いかないんだね」

木蓮はガクッと肩を落とし、自分の席に戻った。

少女は伊座凪（いざなぎ）木蓮といい、夏涼の少なき親友の一人だ。貧乳でかわ

いそうなのだが、何故か本人は気にしてないように見える。ショートヘヤーで「元気っ子」というイメージを持てる。
ふと、夏涼は廊下に気配を感じた。そこには、見た事もない服を着ている少女がいる。
「!?」
夏涼は勢いよく、椅子から立ち上がり「ごめん！　次の教科……英語、遅れるって言っといて！」と木蓮に言い、廊下に出た。
「えっ？　待って夏涼！　待ってくださーい！　夏涼さーん。菅原夏涼さーん」とかなんとか木蓮が夏涼に向けて言っていたが、夏涼にはそんな事は気にならなかった。夏涼はあの不思議な子を追いかけるのが先決だと悟っていたからだ。
　夏涼は記憶を辿る。少女の姿は異常といっていいほど派手だった。黒色を主体とした、フリフリのついたワンピースのような物を着ており、黒いニーソックスをはいていた。髪は黒髪で長かった。しかしサラサラしており、ぱっとみて「綺麗で美人」というような少女だった。
廊下に出たが、少女はいなかった。だが右側の通路の、突き当りを右に曲がった所に、ちらっと、あの黒髪が見えた。そこまで走った。
　突き当りの先を見ると確かに少女はいた。だがふと疑問に思った事があった。

（あれっ？　何でみんな無視してるんだ？）

　誰一人として、少女を見てはいなかった。たとえすれ違ってもだ。見向きもしていないのだ、あんな姿をしているのに。こそこそ話もしないのだ。もしかして夏涼にしか見えていないのかもしれない。そんな事を考えていたら、またいなくなっていた。すると今度は、理科準備室から黒髪が見えた。夏涼は追った。
中に入ると、少女は棚をあさっていた。少しの間様子を見る。すると少女は、棚の中から一つのつぼを出した。その時

「！？」
夏涼の存在に気づいた。少女は驚き、つぼを落としそうになったがなんとか、止めた。だがすぐ先ほどの顔になり、夏涼に向かって、つぼの口を向けてきた。
「？　俺のどうしろというんだ？」
その言葉が分かったようだ。つぼの口を指でつついて、次に目を指した。
「つまり、つぼの中をのぞけと」
「コクコク」
少女は首を縦に振った。この美少女の容姿で、そういう行動をされると何か心にくる、と夏涼は人知れず思った。
この少女は、日本人のようだった。その証拠に日本語が理解出来ている。
（何かの障害者かな）
とそれだけ夏涼は思った。
「どれ、覗いてやるか」
夏涼がつぼの口に目を近づけた時、一瞬、女の子が笑ったように見えた。無邪気に笑うのではなく……

何かを企んでいるような笑みだった。

しかし夏涼はそこまで気にすることなく、つぼを覗いた。すると、自分の体が宙に浮く感じが夏涼を襲った。体が小さくなる感じが夏涼を襲った。体が巨大な引力に引っ張られる感じが夏涼を襲った。そして夏涼はつぼの中に吸い込まれた。

そして現在に至る。
至る前に、夏涼の地面への到達方法だが夏涼は空から落ちた。草原とはいえ地面に激突したわけだから、激痛が襲っている。
なにもない草原。しいて言えば、やたらでかい山があるだけの場所

だ。先ほどの言葉は夏涼の率直な感想である。ちょうど日本について勉強していたからもある。
ふと夏涼は気づく。その授業でここを見たことがあった。夏涼は激痛をこらえ胡坐をかいて座り、考えた。これがわからないと後々困るという夏涼の直感からだ。
「……」
夏涼は物忘れが激しいわけではない。かといって記憶能力がいいわけでもなく、思い出すのにはまだ時間がかかりそうだった。
「……」
たっぷり考えた夏涼は、一つの答えを導き出した。
「ここは……そうか、関ヶ原だ」
夏涼は一人で回答をつぶやく。それに答えるような草のざわめきがあった。
しかし写真の関ヶ原とは少し違った
(何かの観光の建造物があったはずなんだけどな)
夏涼は一人で首をひねる。広大な草原にただ一人座っているので、妙な寂しさがあった。
夏涼は思いついたことをつい口にしてしまった。聞いたら誰もが笑い始めるようなことを。
「タイムスリップ？」
その時、遠くから男が走ってきた。その男は、簡単な鎧のような物を着ている。しいて言うなれば、足軽のような格好だった。
その人、男は大きな箱を担ぎ、すごい勢いで走って来た。
「どけどけ～！」
男は夏涼にむかい突っ込んでくる。だがよくあるやつだ。見るなと言われたら見る。食べるなと言われたら食べる。夏涼はその精神にのっとり、どけと言われたらどかない。夏涼は男に向かって仁王立ちをした。
夏涼の前で、男は止まった。
男は焦っていた。命からがらに逃げているのに、まさか前を阻ま

れるとは思ってもみなかった。
「お前、どけと言ったのが、分からなかったのか」
「いや分かったが」
「……ならばどかないというのだな。それならこっちも」
男は、懐に手を入れる。男には秘密兵器があった。
「考えがあるってもんよ」
男は、小刀のような物を出した。秘密兵器というのはこのことだった。夏涼は少々動揺したが、よくある拳法の構えをし、挑発をした。
「いいな、来いよ」
夏涼としてはいい機会だった。今までの学習の成果を出す時だからだ。幸いにも男は挑発に乗ってしまった。
「いい気になるんじゃ・・・ねぇ！」
男はその小刀を夏涼に向けて突進。いわゆる突きを繰り出してきた。
夏涼は即座にしゃがみ、小刀を持つ手を下から左手でつかみ、自分に引き寄せる。
「八極拳　六大開　頂」
夏涼はそのまま男の腹部にめがけて、右肘を向ける。
「？打頂肘！」
直撃。みぞおちにうまく決まった。だがこれは決定打ではなかった。夏涼は追撃を行う。
男はいきなりのことに頭が真っ白になっていた。夏涼はそのすきを突き、左胸当たりを狙った。左手に力を込め、
「弓歩沖拳！」
左足を前に出しながらそれと同時に左手を男に放った。男は体勢が崩れた状態で何もできず、そのまま夏涼の狙い通りの所に決まった。男はなすがままに、勢いに身を任せ、右寄りになる。
（ここが決め時だ！！）
夏涼は右手に力を入れ渾身の勢いと回転をつけて放った。

「オリジナル！　旋風？拳！」
ちょうどあばらの中心部分に直撃した。この技は回転で威力を高める技なので、ここら辺に当たるのがちょうどよかった。
夏涼は最後の力で男を押す。男は自分より下の子供に負けるのは死ぬほど悔しかったがなすがまま、地面に仰向けに倒れた。わずか５秒の戦いだった。夏涼は少々だが、中国拳法をたしなんでいた。勉強の成果というのはこの事だ。
「ほう、自分より大きな男をあの速さで倒すとは。貴殿なかなかやるな」
夏涼は後ろ（・・）から（・・）褒められた（・・・・・）。さっと振り向き、態勢を立て直す。そこには、派手ではあるが動きやすそうで、行動しやすそうな服を着た、……少女が馬に乗っていた。その整った顔立ちからは威厳が見られ、なんとも偉そうだった。
「そ……そりゃどうも」
夏涼は一応礼を言った。気圧されたわけではないが、妙な感じだった。
「今貴殿が倒したのは、盗賊だ。私はこの盗賊を追っていたのでな、手間が省けた。例を言う」
「そりゃどうも……？」
夏涼は再度謝る。そして気づく。
（今、盗賊って言いました？）
夏涼は考える。自分の今の時代に「盗賊」が果たしていただろうか。何かとても懐かしい感じがした。そこで少女からの視線に気づいた。
少女は驚いていた。いま目の前にいる夏涼の服装が珍しいからだ。
「その格好、とても珍しいな」
夏涼の格好は制服だ。しかしサンフランシスコ高峰学園の制服は普通とは違い、特殊だった。自他共に見つめるかっこよさがあった。これを目当てに受験をする中学生もいた。
しかし、夏涼から見れば、少女のほうが珍しい格好なわけで

「俺から見るとあんたの方が珍しいと思うがな」
「まさか貴殿……『天地の使者』か？」
「……は？」
スルーされてちょっぴり落ち込んでいた夏涼に、少女は立て続けに話す。
「それならば、星華（せいか）様にお伝えしなくては」
少女は盗賊の男を担ぎ、馬に乗り夏涼に手を差し伸べた。
「貴殿、乗れ」
人のこと基本無視な少女に言われまくりどんどん混乱する夏涼だったが、一つだけ聞きたいことがあった。
「……一ついいですか？」
「短いのならばいいぞ」
「あんた、誰？」
「あんたとは失礼な奴だ。私の名は」
少女の口から発せられたものは、驚くべき言葉だった。
「星華様の忠臣、前田利家なるぞ！」
「はぁ！？」
『前田利家』という言葉に夏涼は驚きを隠せなかった。

謎の少女と全ての始まり（後書き）

初投稿です！！
この小説は「戦国時代」を基に作っております。
何か不具合やイメージが崩れた場合、ご了承ください

第二章　少女な大将軍とその従者

夏涼と「自称」利家は馬に乗り利家の言う「星華様のもと」へ向かう。夏涼は利家の腰につかまっている形だが、風を切るたびに利家の短髪から流れる甘い香りがするので変な気分になる。利家も、学校にいた女の子程ではないが、整った顔をしている。胸も大きい。木蓮や、女の子とは比にならないくらいだ。

（いいね～、最高）

夏涼は一般女子に言ったらひかれそうなことを考えつつ、馬に揺られた。

馬に乗って、何時間か経過した。村もいくつか通り過ぎている。

（しかし……どの村も昔ながらの木造建築だな……本当にタイムスリップかもな）

夏涼は甘い香りでふらつきそうになりながらも思考した。

日がすっかり傾き、夕暮れになった頃、「星華様のもと」についた。利家が馬から降りる。

「さぁ、ここに星華様がいらっしゃるぞ」

利家がさした先には一つの建造物があった。しかしただの建造物ではない。

（おっ俺ってやっぱりタッタイムスリップしたんだな……なんたって）

（目の前に城……安土城がありゃそう思うしかないだろ！！）

夏涼は安土城イメージ図は何度も見た事があった。この城はそのイメージ図にぴったり一致した。夏涼は口をだらしなくあけたままだった。

夏涼は一つ質問した。

「あー利家さん？」

「なんだ、貴殿」
「利家さんが、星華様、星華様言ってる、その星華っていう人は……」
「かの、天下人になりそうな（実際なってないけど）名将、織田信長ですか？」
「あぁ、そうだぞ」
夏涼は固まった。
（ははは……ちょっと整理するか）
夏涼は冷や汗をかいた。そして半笑いで思考する。
（えっと、俺は本当にタイムスリップしたわけで、来たのは戦国時代のパラレルワールドだってことだ……自分で考えてばからしくなってきたな）
夏涼はため息をつく。そして利家を見た。
「えっと、その信長さんに、会わせていただけるかな？」
「うむ、私もそのつもりだ」
利家は夏涼を置いて一人で歩きはじめ夏涼はそれについていった。
城内はすごく豪華な造りだった。いたるところに金ピカの彫刻が掘ってあり、まぶしい。
夏涼たちが何階かあがった先に大きな金色の襖があった。利家は襖に手をかけた。
「この先に星華様がおられるぞ」
利家は、小声で夏涼に言い、その襖を叩いた。
「星華様、お伝えしたい事があります」
と言い、襖を開けた。
（この時代でもノックみたいなのがあるんだな……）
夏涼はこの時代の意外な習慣に驚いた。

（ノックが始まったのって近頃じゃないっけ……）
そして夏涼はこの世界と、夏涼が来た世界とではズレがあることに気付いた、が信長の前なので思考は停止した。
信長はやけに豪華な椅子に足を組んで座っている。女王様というようなオーラを出しており、君主の威厳を夏涼は感じた。
（これが……あの婆娑羅将軍、織田信長……）
夏涼はその威厳に圧倒され、生唾を飲む。
利家は信長のまえに正座した。それにつられ夏涼も正座をする。
「……それで、伝えたいこととは何かしら。志南（しなん）」
信長は利家の事を志南と呼んだ。夏涼の事は突っ込むことなく進める。
「はっ。天地の使者と思しき人物を捕まえてきました」
（俺は動物かなんかか？）
当然、夏涼の考えがわかるわけもなく利家は夏涼との出会いを話した。
「……ということなんです」
利家はえらく長い話をした。利家は語るのが好きであった。
「……なるほど、確かに志南の言うように、不思議な格好ね。あなたどこから来たの？」
「うっ……あ～なんというかですね」
「早く言いなさい」
「俺はここと同じだけど、ここじゃないというか……」
「なによ、はっきりしないわね」
信長が足を組みかえる。足が長いのでその行動さえも綺麗だった。
「正直に話すと、俺はここ日本の未来から来たんだよ」
『！？』
二人は驚いた。夏涼を見て次の言葉を待つ。
「だから、俺は君たちがどんな人物なのか良く知っている。とまぁ言っても想像と全然違ったんだよね」

「……なるほど、信じがたい話だがもしこれが本当ならあやつの予言どうりね」
「はい、今日は満月ですし」
「？」
夏涼は首をかしげる。
「それってどういう事？」
「ここは私が説明します星華様。……先日「星読みの鳴」とかいう近頃噂になっている女がな、勝手にここに入ってきて「次の満月の日、一人の天地の使者が現れます。その使者はこの乱れた世を必ず納めてくれます。あなたもその天地の使者に恥じない立派な君主になってください」とだけ言ってな、帰ってしまったんじゃ。それもその噂は全国に広まってしまってな。大変な騒ぎになっておる」
「なるほど……」
夏涼は顎に手を当て考えた。
（俺がこの世界に来ることをわかっていた……いや予知していたということか？）
信長は組んでいた腕を戻し、ため息をついた。
「考えてもらちが明かないわね。であなた名前は？」
「へっ？　俺？」
「貴殿、場をわきまえろ」
「別にいいわよ志南。で名は？」
「俺の名前は、菅原夏涼です」
「夏涼ね」
信長はまた腕を組み考え込んだ。利家は正座のまま下をうつむく。
「分かったわ。志南、夏涼をあなたの兵として旗本に置きなさい。そしてその中国拳法とやらを十分に生かし、私の天下統一に協力しなさい」
「……え？」
夏涼は耳を疑った。
「喜べ夏涼！貴殿は私の配下になったのだぞ！」

（あぁなるほど……って納得できるか！）
夏涼は心の中で叫んだあと、ため息をつき確認する。
「て言う事は、俺も戦場に出ると」
「そういう事よ。あと私の指示は絶対だから……いいわね」
「……はい」
（そんなに殺気みたいなオーラを出さないで！信長さん！）
夏涼は信長の殺気に耐えられず目をそらした。
目をそらした夏涼に信長は聞いた。
「ところであなたの、『戦生の名』は何？」
「へ？」
「私はあなたの主となるのよ。そのぐらい知っておかないと」
「えっと、戦生の名……ってなんですか」
利家と信長は驚いた。この時代で戦生の名を知らないというのはあり得ないことだった。
「戦生の名を知らないなんて、本当にあなたは天地の使者なのかもしれないわね」
「そうですね星華様」
利家は信長から視線を外し夏涼に向ける。
「説明するぞ貴殿、良く聞いておれよ。戦生の名というのは、戦いで生きる名と書いて、親しい間柄で使われる、そのもののあだ名みたいなものだ。大きな心の動きがあった時、その場所の特徴や、現状などを元に自分で決める。そのものの生き様みたいなものを現したのが戦生の名だ。しかしこれは簡単に使ってはいけないぞ。親しくもない人が使うと即刻打ち首だ。……私の場合、星華様にいつまでも付いていく事を決心しなのが、南の所でな、だから「志南」なんだ。分かったか貴殿。」
「あぁ、大体。という事は、まず戦生の名を作らないといけないのか」
「別にそんなに急がなくてもいいわ、夏涼。まずはこの乱世に慣れる事よ。そうしてからでも遅くはないわ。それと一応、あなたを天

地の使者と考えていくから頑張ってちょうだい」
「はい」
夏涼は素直に返事をした。あの殺気はもう嫌だった。
「では、これで失礼します」
そう言って利家は立ち上がり会釈をし外に出向く。それにつられ夏涼も立ち上がり、軽く会釈をして、この場を去った。
信長の部屋を去った後、利家は、夏涼に満面の笑みを見せた。
「貴殿、すごいな。一回で星華様に気に入られたのは、貴殿が初めてじゃぞ」
「そうなのか」
夏涼は、気に入られたとは思えなかった。
「普通ならば、兵になるのはおろそか、名前も聞いてもらえないのだぞ」
「へー」
夏涼には実感がないが故、適当な返事を返した。利家はその返事に眉を少しゆがめたが、気を取り直す。
「さて、兵になったのだから、未来を考え、まず愛武器を買わなくてはいけないな」
「武器か……確かに素手では戦乱の世は生きていけないな」
(相手は鎧やらの鉄だからな……素手で挑むのはちょっとなー)
「まあ、いい刀鍛冶を紹介するから、そいつと会うまで、考えておれ」
「ああ」
夏涼は顎に手を当て考え始めた。
まだ見ぬ自分のために

初会信長
初会利家

夏涼動揺
何起不明

第二章　少女な大将軍とその従者（後書き）

二話です。利家と同じく信長も私のイメージですのでご了承ください。
この話ですが、いろいろおかしい点があります。（利家がなぜか安土城にいるとか）まあそこは目をつぶってください。
最後の奴ですが私の作った四字熟語みたいなものです。（意味は自分で考えてください）
それでは第三章で～

第三章　乙女な猿と爺な鍛冶屋（前書き）

戦国時代の長さの数え方がわからなかったので鎌倉時代ぐらいの長さの数え方（束）となっています。ご了承ください。

第三章　乙女な猿と爺な鍛冶屋

夏涼は、歩きつつ考え始めた。
考えていた夏涼は、誰かにぶつかった。
「きゃっ」
少女は尻もちをつく。童顔で長いツインテール。まだまだ幼い感じだ。
「ごめん！　大丈夫？」
夏涼はとっさに手を差し出した。少女は少し驚いたが、すぐ夏涼の手を取り、立ち上がった。
「うん、大丈夫。ちょっと痛かったけど。でも優しい人に助けてもらったから大丈夫だよ」
少女は満面の笑みを浮かべた。それに夏涼はすこし心に響くものがあった。
（べっ別にロリコンじゃないんだからね！！）
一人で暴走する夏涼。そんな夏涼に少女は尚も話しかける。
「それも私から、ぶつかちゃって、すみませんでした」
「あっいや、俺も、悪い所はあったし、五分五分で」
少女はクスッと笑った。笑わすつもりはなかったので夏涼は首をかしげた。

「おお、秀吉殿ではないか。どうした、夏涼殿と手をつないで」

突然利家に話しかけられ、少女の顔が赤くなった。そしてさっと夏涼の手を払って、うつむいた。

（なんだよ、いまいいムードだったのに――！？）
「……って、この子が秀吉！？」
夏涼は驚いた。口をあんぐりあけ目を丸くする。
「はい。私は、羽柴秀吉。戦生の名は、紫陽花（あじさい）です」
「秀吉……こんな子が秀吉……」
完全に夏涼はフリーズしていた。それを見かねた利家は、夏涼ををつついた。
「ああ、俺の名前は、菅原夏涼。戦生の名は……まだ無いんだ」
「そうですか……しかしこれも何かの縁。助けてもらった恩もありますし、私の戦名を預けます、夏涼さん」
「え、いいの？　まだそんなにっていうかあったばかりなのに？」
秀吉は小さく頷く。
戦生の名は略すと戦名といい、相手に使わせる際「預ける」という。夏涼は理解しうなづく。
「では先を急ぐので、これで」
パタパタと足音を立て秀吉は走って行った。
夏涼は秀吉に手を振り、元に道を歩く。
（素手だから、リーチが短いほうがいいな。それと細かい動きができるのと、使い方によってさまざまな機能ができるもの……あった、あれがあるじゃないか。

中庭のしばらく歩くと、一つの小屋があった。利家はその小屋の扉を大胆に開け、中に入って行った。夏涼もそれにつづく。
中には、一人の、男がいた。その男は胡坐をかいてすわり、夏涼に視線を合わせた。
「匠爺、こいつが新しく仲間に入った奴でな、武器を作ってほしいんだ」
この男、匠爺といった。

「……高くつくぞ。志南」
二人は戦名を預けあっていた。
「いいぞ。まあ、そんなには出せないけどな」
利家は笑いながら、俺の背中を押して、匠爺の近くまで押した。
「……俺の名前は、菅原夏涼です」
「……そなた、いい目をしておる」
「はい？」
「なんでもない。それで、望む武器は」
「はい、トンファーを作ってもらいたいです」
『？』
二人は首をかしげる。この世界にまだトンファーはない、そのことに気付いた夏涼はトンファーについて説明した。
「……という武器なんですけど、俺のオリジナルで、まず刀を……刀といっても刃は広く、握り拳ぐらいの横幅で。あっそんなに長くなくていいです、八束ぐらいの長さの刀を二本作ってください」
匠爺は静かに聞いていた。新しい武器を作るのは刀鍛冶として誇らしいことであった。夏涼はそのことに気を良くし、さらに話し込む。
利家はそこら辺にある武器を手に取り素振りをしていた。驚くべき速さで刀を振るう。夏涼には剣筋が見えなかった。さらに利家の持っている刀はとても長い。二十束はある。
「ふぉふぉふぉ、志南の奴はいつ見ても怪力じゃのぉ」
「はい……すごいですね」
(絶対俺にはできないな)
夏涼は心底そう思った。
匠爺はひげをやさしくなでながら続ける。
「志南の武器をおぬしは知っておるか？」
「いえ、知りませんけど」
「志南の武器、方砲長鵬(ほうほうちょうほう)は」

「四十束じゃぞ」

「！！！！！！」

夏涼は驚いた。いやもうこれは恐怖に近いかもしれない。

（四十束だってぇぇぇ！！　どんだけ長いんだよ！　でも今の利家を見ると扱いそうだから怖い！！）

四十束ははだいたい三〜四メートル。利家が縦に二人いて同じ長さぐらいだ。

「まあ、槍じゃがな」

「いやいや、それ何の慰めにもなってませんから！！」

そう言って俺は小さくため息をついた。

「貴殿、もう頼めたのか？」

いつの間にか夏涼の傍らにいた利家が聞いてきた。利家からは甘い香りが漂い、一瞬夏涼はたじろぐ。

「……どうした貴殿。そんなに私を見て。顔に変な物でもついてるか？」

「いや、そんな怪力でも利家は女の子なんだなって思ってた」

「っ！！　ばか！」

夏涼はバシッと叩かれた。

夏涼を叩いた直後、利家はすごい勢いで紅潮していった。

匠爺が夏涼と利家の間に入る。

「お二人さん。いい雰囲気になるのはいいが、早く注文を言ってくれ」

「バカ！　そんなんじゃないぞ！」と利家が言ったがさらに紅潮して、下をうつむいた。

「ああそうだった。……じゃあ最後に横にもてる部分をつけてください」

「横に持てる？」

「ああ、絵で描きますね」
そう言って夏涼はポケットに入っていたメモ帳とシャーペンで絵を描き始めた。
「！？　貴殿、なんじゃその筆のようで筆で無い物は」
「これか？　そうか知らないんだな。俺の生まれ育った所ではこれを、シャーペンと言ってな、これで文字書いたりしたんだよ」
「しゃ……しゃーぺん？」
ぎこちなく利家は繰り返す。その様子を見た夏涼は少し笑う。
夏涼は少しペン回しをした。ソニックという技だ。それをやるたびに利家は驚き、夏涼はそれが面白かった。
「……よしこんなんでよろしくお願いします」
「うむ、しかしこのように特殊な型になると少々時間がかかるぞ」
「はい、大丈夫です」
夏涼がそう言うと匠爺は「まったく、近頃に若いもんは特殊な型ばかりを選びよって」と言いながら重い腰を浮かし、奥へ行ってしまった。
「さて帰るぞ、利家」
「さっきから気になっておったんじゃが、なぜ私が貴殿に呼び捨てにされているのかわからん。……が、まぁいいじゃろう。帰ろう」
利家は、夏涼の二歩前を行くようにして、安土城内に行った。

二人が城内に入ったすぐに秀吉が走って来た。
「夏涼さ～ん、利家さ～ん軍議が始まりますよ～」
「りょうか～い――って俺も！？　紫陽花ちゃん！」
「ちゃんってそんな……」
秀吉は顔を赤らめた。利家はその二人の様子を見てニヤニヤしていた。
秀吉は頭を振り、夏涼を見る。

「それよりもっ、えっと夏涼さんも来いって星華様がおっしゃってました」
秀吉も信長と戦名を預け合っている。君主と配下なので当然のことなのだが。
「そうか、もうそんな時間か、って秀吉殿、私の事は志南と呼べとあれほど――」
「そういう利家さんも私の事は紫陽花と呼んでください」
二人はにらみ合った。もう戦名を預けあうような仲なのだが、なぜか呼びづらく預けあっていなかった。
「まあまあ二人とも。早くしないといけないんじゃないの？」
「おおそうであったな。では行くぞ！夏涼！」
「あ、ああ」
夏涼はそのまま秀吉と利家の後をついて行った。
秀吉は会議の場に着くまで、三回コケた。
（ドジっ子属性だな～）
と満面の笑みで思う夏涼だった。

初会秀吉
刀鍛冶爺
夏涼仲四
会議先待

第三章　乙女な猿と爺な鍛冶屋（後書き）

「戦国時代の長さの数え方がわからなかったので鎌倉時代ぐらいの長さの数え方となっています。ご了承ください」
と前書きで書きましたが、分かり次第、直していきます。

こんな小説ですがお気に入りに追加してくれた人が、出てきてくれました。
あざーす！！
これからも書いていくんでよろしくお願いします！！

第四章　初めての軍議と老将の智

二人が城内に入ったすぐに秀吉が走って来た。
「夏涼さ～ん、利家さ～ん軍議が始まりますよ～」
「りょうか～い――って俺も！？　紫陽花ちゃん！」
「ちゃんってそんな……」
秀吉は顔を赤らめた。利家はその二人の様子を見てニヤニヤしていた。
秀吉は頭を振り、夏涼を見る。
「それよりもっ、えっと夏涼さんも来いって星華様がおっしゃってました」
秀吉も信長と戦名を預け合っている。君主と配下なので当然のことなのだが。
「そうか、もうそんな時間か、って秀吉殿、私の事は志南と呼べとあれほど――」
「そういう利家さんも私の事は紫陽花と呼んでください」
二人はにらみ合った。もう戦名を預けあうような仲なのだが、なぜか呼びづらく預けあっていなかった。
「まあまあ二人とも。早くしないといけないんじゃないの？」
「おおそうであったな。では行くぞ！夏涼！」
「あ、ああ」
夏涼はそのまま秀吉と利家の後をついて行った。

軍議は、信長の部屋の隣が会場となっていた。ゲームなどで見る奴そのままだ。暗い部屋の中で、夏涼を含め五人がいた。
「みんな揃ったわね。では軍議を始めます」
「ちょっと待った。何で俺も呼ばれたんですか？」

信長はあきれたように溜息をつく。
「あなたは天地の使者でしょう。じゃああなたがいないとおかしいじゃない」
「そうか、そうだな。ごめん」
信長が「天地の使者」という言葉を発したので、夏涼にみんなの視線が集まる。
（うわぁなんだこの空気……これはあれか！？　自己紹介を望んでいるのか！？）
夏涼はこの微妙な空気を打破するため、勇気を振り絞り口を開く。
「えーあーおっ俺の名前は菅原夏涼です。一応、天地の使者らしいです」
「一応とは何じゃ、胸を張れ胸を」
利家は夏涼にちゃちゃを入れる。それと同調するように周りは騒がしくなった。
「あなたが鳴さんの言っていた、天地の使者だったのですか！」
秀吉は目を輝かせている。
「うん、あくまでも一応だけどね」
夏涼は照れながら頭をかく。
「じゃあこちらかも紹介をするわ……ゴホンッ」
信長がわざとらしく咳をする。なんかその仕草が妙に可愛く、夏涼は笑ってしまった。
「なによ」
信長は夏涼を睨む。しかしあまりにも睨み方がマンガみたいだったのでまた笑いそうになるが、無理やり抑え込む。
「いやなんでも。続けて」
「……もう知ってるだろうけど、私が君主の織田信長よ。戦生の名は星華よ」
信長は「さっ続けて」と言って席に座る。次は秀吉がつなげる。
「わ、私は星華様の将、羽柴秀吉です。戦生の名は紫陽花です。ふつつか者ですがよろしくお願いします」

「いや、それ普通言わないから」
夏涼の突っ込みに「ひゃわ！」と言って秀吉は下を向いた。夏涼は微笑みながらその様子を見る。
「じゃあ次は私じゃな。私は前田利家。戦生の名は志南ってもう言ったしいいか。まあ貴殿の主となるのだから逆らうなよ」
利家は夏涼に顔を近づけドスを聞かせていった。夏涼は先ほどと打って変わって苦笑いをしながら利家から離れる。
「次は私か。私は柴田勝家。戦生の名は嘉苑（かおん）だ。私は智将だから前線へは出ないだろうがよろしく頼む、菅原」
「！　はい」
（この人が柴田勝家……なんか厳しそうだなぁ）
夏涼はそうは考えつつもある場所を見てしまっていた。それは、勝家の胸だった。勝家自体、美人であった。髪も長く、頭の下で髪を止め体の前にながしている。顔も整っており美人なのだが一番目を引くのが「胸」であった。とても大きい。バスケットボールより大きい。普通の男なら見てしまうほどだ。
（いやーいいね～やっぱ――）
「それでは本格的に始めるわ」
夏涼の顔がだらしなくなっているのを見て信長は話をそらした。
「明後日の戦、桶狭間での戦だけど……」
「！」
夏涼はピクっと反応した。
（まさか！　俺は桶狭間の戦いからなのか！？）
見た感じではわからないが、心のうちではとても動揺していた。日本語がおかしくなるぐらい。夏涼の生きる戦国時代のパラレルワールド、つまり……
（戦国時代との違世（いせい）はここからなんだ）
「大丈夫？夏涼」
「大丈夫。続けて」
「そう」とだけ言って信長は続けた。

「いい策はあるかしら、嘉苑」
「はっ」
そう言って勝家はそばにあった巻物を広げた。巻物は地図だった。年代物のようで、所々に傷などが入っていたが、地形などは詳しく書かれてあった。
「多分このあたりに今川本陣があると思われます」
勝家は地図の右下のあたりを指す。
「しかし、詳しい場所が分かりません。そこで誰かに、詳しい今川本陣の場所を探してもらいます」
「あ、じゃあ私やります」
秀吉が手を上げる。
「えっ大丈夫？紫陽花ちゃん」
「大丈夫ですよ～。任せてください」
「……じゃあ、場所散策は秀吉軍で」
「はい、わかりました」
「あら、もう戦名を預け合っているの？　早いわね」
信長は夏涼に意味ありげな口調で聞いた。夏涼は苦笑いだけを見せ、反論ができない。夏涼の頭には「打ち首」だけがエンドレスリピート状態だった。
「いいんですよ星華様。私から預けたんです」
秀吉が夏涼と信長の間に入る。
「そうなの？　ならいいわ」
信長は夏涼達から視線を外し勝家へと向けた。勝家は何事もなかったかのように話を続ける。
「……そして本陣が分かったら、ここに砦があるのでここを落としてもらいます。そうすることで今川軍の注意をひきます」
「じゃあその役、私がやるぞ」
利家が小さく手を上げ言う。
（おおう、利家の奴、なんの相談もなく決めやがった。……まぁ勝家さんの事だから俺にも何か聞くだろうなぁ）

「よし、では任せた」
「決まっちゃった！！　俺がいる意味ほとんどねえ！！」
「落ち着きなさい夏涼。あなたは雰囲気になれるの」
信長は夏涼に注意した。夏涼はしょぼくれて黙った。
「そして落とした直後に今川軍に奇襲をこの山道からかけます。……この役は私がします」
勝家さんも小さく手を上げる。
「しかし倒しはしません。最後を飾るのは星華様ですし、伏兵などがいた場合、奇襲する事で罠などを無駄に使わせます」
そう言って勝家は奇襲ルートをなぞった。当然のことながら勝家と信長も戦名を預けあっていた。
「そして奇襲する事により、今川軍の注意がまた本陣に向きます。そのすきを突き、利家軍は敵軍砦の相手を叩いてください」
「うむ」
「了解です」
利家と夏涼は返事をする。
「最後に星華様が今川本陣を攻め、叩き潰す、という風に行きたいと思います」
勝家は巻物をさっきの場所へと戻した。
最後に信長は審議を問った。
「私は今の作戦でいいと思うわ。何かある人はいない？」
『大丈夫です』
声がそろう。
「では、この作戦で行くから、配下に伝えておいてね。それでは解散」
信長の号令でおのおの解散した。
夏涼も自分の部屋と説明された場所へ向かった。
最後に残った信長はふと呟きを洩らす。
（ふふ、夏涼の天地の使者としての初陣ね。楽しみだわ）
信長は一人微笑んでいた。

うろたえる民衆。逃げまどう足軽。燃え行く家、旗、城。果敢に攻めるも倒される武将。
これは夢、そんな事は分かっている。しかし夢にしては、妙にリアルであった。
これが戦。人々が殺し合い勝敗を決するもの。そして
これが俺の道。これから俺は、何人の人を犠牲にし、不幸にさせ乱世を進んでいくのだろうか。
そんな疑問が夏涼の頭に浮かんだ。

初行軍議
初会勝家
夏涼初陣
悪夢現実

第四章　初めての軍議と老将の智（後書き）

小説の量、少なかったです。すんません。時間がなかったんです。

新コーナー！　「キャラクターインタビュー！！」というのをこれからやりたいと思います。

では、最初を飾るのは、「前田利家」！！

「いやぁ、何か恥ずかしいな」

「軽い感じの質問しかしないんで、楽にしてください」

「ん、そうか？　じゃあ楽に――」

「利家さんって実際のところ何歳なんですか？」

「いきなり聞くかそれ！？　全然軽くないぞ！」

「まぁまぁいいじゃないですか。でどうなんですか？」

「なんか流された感じじゃのぉ。実際、私は夏涼殿と同い年くらいじゃぞ」

「……なんじゃその目は、疑っておるのか？」

「いや、疑ってないですけど？」

「なんじゃその態度は！！　貴様さっきから――」

「では、このへんで。また次回～」

「な、な、なんじゃったんじゃーー！！」

完

第五章　清きそよ風と君主の言葉

「はっ！」
夏涼は何かに引っ張り出されるように起きた。手は汗ばんでおり、呼吸は荒い。
（あれは夢だ。ただの悪い夢なだけなんだ）
夏涼は自分に言い聞かせながら、部屋から出て、庭の芝生のある場所に立った。
夏涼は深く深く呼吸をした。
（考えても仕方ない、体動かそっ！）
夏涼は中国拳法の八極拳の構えをとる。

「八極拳　六大開　頂　？打頂肘」
動きを唱えながら、素振りをする。
「弓歩沖拳」
昨日戦った男を想像しながら放つ。
「旋風？拳」
拳を放つ。静かすぎる心地いい沈黙。心が洗われるようで心地が良かった。
「朝から練習とは感心ね」
沈黙を破ったのは、信長だった。薄いピンクのかかったパジャマのような服を着ていた。信長は着そうにない服だったが、なかなか似合っていた。
「そいつはどうも」
夏涼は皮肉っぽく言った。
「そこ、そういう所は感心しないわ、こっちは褒めてるんだから」
信長は夏涼に指を指す。
「ていうか、いいんですかこんな所にいて。一応あなたは君主なん

でしょう」
（俺は一兵士だ。君主とは格が違いすぎる）
夏涼はそう考えた。だが信長はため息でそれを返す。
「君主だからこそ、味方との交流が大切なのよ。それにあなたは天地の使者でしょ、私と話しても何の問題もないわ。むしろ対等のはずよ」
「いや、そうだけどさぁ」
夏涼は頭をかいた。
信長は先ほどの表情とは打って変わって、頬を赤らめて言った。
「それとも、私と話すのがいや？」
「！　いや、別にそんなんじゃないですけど」
夏涼はたじろぐ。信長のこんな表情は見たことがなかった。
「なら、いいじゃない」
またも表情が変わり、信長は夏涼に満面の笑みを見せる。
「で、なにようですか？」
「まあ別に用は無いんだけど、初陣を前に天地の使者はどうしているのかなと」
信長は空を見上げながら言う。
「まあ緊張はありますけど」
「そこ！」
急に指を指され、夏涼は不覚にも驚いてしまった。
「夏涼と私は対等なのだから、敬語は無しよ。……まあ身分はずいぶん差があるけど」
最後の言葉は嫌みたっぷりで言われた。
「わかりましたよ。これからは敬語を使います」
夏涼はため息をつく。すると信長が真剣なまなざしで夏涼を見てきた。
「夏涼―あなた悩み事があるわね」
「！」
夏涼は下を見たまま目を見張る。

「きっと、明日の初陣のことね」
夏涼は夢を思い出した。思い出しただけで足が震えてきた。
「……信長にはなんでもお見通しなんだな……」
震えた声で夏涼は返す。信長は「ふんっ」と鼻で笑う。
「当り前よ。私は君主よ？　兵士の悩みなんて話をしただけでわかるわ」
「……さすが君主ですね」
夏涼は肩をすくめる。信長はまっすぐな目で夏涼を見る。
「まあ、詳しいところまではわからないけど。う～んと、だいたい明日の戦への……恐怖でしょ」
「……」
（いきなり図星つくかなぁ）
夏涼はため息をつく。悟られないようにしていたつもりだったが、どうにも無理だったらしい。
信長は胸を張ってこう言った。
「私もそういうときはあったわ。不安になって戦えなくなった時もあったわ」
信長は思い出にふけるように話していた。
「でもね、そういうときはこの言葉を思い出したの。なんだか元気が出てくるのよね」
信長は苦笑した。夏涼はずっと信長を見ていた。
「えーそれでは、コホンッ」
信長はわざとらしく咳をして言った。

「悩みを忘れるな。恐怖を忘れるな。すべてを抱えて進め」

そのとき、夏涼の中で――何かが軽くなった。
「戦の中で、この言葉を忘れたときはなかったわ。……夏涼も、つらいだろうけどすべてを抱えて進むからこそ、成長するかもしれないわよ」

そう言って信長は、夏涼に背を向けた。
「さて夏涼の顔も見れたし、帰るわ」
「ああ、じゃあな」
信長は歩き出す。夏涼も自分の部屋へ歩き出そうとしたが、後ろを振り向き信長を呼んだ。
「あぁ、信長ー」
「なに？」
信長は振り向いた。その顔は――日を浴び美しく輝いていた。
「ありがとな」
夏涼は微笑んだ。そして信長の返答を待つ。
「……どういたしまして」
信長もゆっくりとほほ笑んだ。
信長は歩いて夏涼の視界から消えていった。
夏涼は一人、軽くなった心で確認するように言った。
「悩みを忘れるな。恐怖を忘れるな。すべてを抱えて進め、か」
足元では芝生が日光に当てられ、青々しく輝いていた。

昼、夏涼は廊下で利家と会い、何気ない会話をした。その中で夏涼は、疑問ができた。
「なぁ利家。利家が納めている土地はどうしてんだ？」
歴史上、利家は能登（今の石川県北部）を納めている。しかし夏涼の違世ではどうかわからなかったが、持っているだろうという前提で話した。
利家は「なんじゃ、そんなことか」と言い、夏涼に話し始めた。
「なんか『織田配下収集令』とかなんとかいう令が出てのぉ。それで私の納めている土地は違う私の配下に任せたんじゃ。だからここにおれるのじゃ。きっとほかの奴もこんな感じじゃと思うぞ」
利家は胸を張って威張る。夏涼は苦笑いだ。
それから当てもなく、目的もなく時がたつのも忘れ、利家と語り合っていた結果……

窓を見ると、夕日がきれいだった。

夏涼は自分の部屋に戻ると、布団に全体重をかけ倒れた。足がまだ痺れていた。

人体について一つわかったことがあった。

（立ちすぎてると、足って痺れるんだなぁ～）

そのまま夏涼は目をつぶり、今日の感想を述べた。

「あ～なんかもう今日は疲れた」

いろいろ得られた物はあった。だがそれに支払った代償が大きい。多大なる疲労感。足の強烈な痺れ。くだらない話（くだらないとは何だ！と聞こえてきそう）を延々と聞いた耳、脳。今夏涼は睡眠を何よりも欲していた。何よりもだ。

夏涼は自分の欲に身を任せそのまま、瞼を閉じた。

桶狭間の戦い前夜の話。

清風日浴

信長貰言

悩忘恐忘

全抱進行

第五章　清きそよ風と君主の言葉（後書き）

またまた本文が短かったです。すみません。もっと精進したいと思います。

さて！「第二回インタビュー」を始めます！！

「今日は、我らがドジっ娘、紫陽花こと羽柴秀吉～！」

「ひゃわわ！　どんな紹介ですかそれ」

「いや、作者的になかなか好きなキャラ設定だったので……」

「好きってドジがですか？」

「うん、だって……」

「ドジっ娘って見てると、萌えるじゃん！！」

「……」

「すみません、調子に乗りました。反省はしてません」

「葵せきな先生に謝ってください！！」

「お、知ってるね～結構マイナーだと思ったけど」

「……」

「……わからない人は「生徒会の一存」シリーズを見てね！！」

「なんの宣伝ですか！！」

「さて、意外にツッコミができる秀吉、という新しい人格がわかったところでここらでお別れで～す。さよなら～」

「ひゃわわっ何か不本意な終わり方をされました……」

ちなみに紫陽花の口癖、「ひゃわわ」は恋姫無双の朱里をパクりました。

ていうか紫陽花が朱里をほとんどぱくっています（髪以外）

すんませんwww

第六章　天地の使者とその初陣

「か……かりょ……かりょう」
夏涼の耳に天から声が聞こえる。
（あぁ綺麗な声だなぁ、ずっと聞いていたいなぁ）
夏涼は、そんな幸せな気分に浸っていた。が
「夏涼！　起きなさい！！」
夏涼は勢いよく瞼を開く。あれは天の声ではなかった。
「わああ！　信長さんでしたか！」
夏涼はオーバーリアクションで飛び起きながら驚いてしまった。
天の声は信長の声であった。
「どれだけ驚いてんのよ、まったく」
信長は腰に手をあてため息をついた。夏涼は頭をかきながら布団から出る。
「いや～まさか信長直々、おこしに来てくれるなんて思っても見なくて」
「いや、好きでおこしに来たわけじゃないわ。志南が厠に行っていて、夏涼が遅れたらいけないからと言ってきたから、仕方なく起こしに来たのよ」
（ツンデレ、ナイス！！）
夏涼は信長に向って親指を立てた。信長はそれを見て首をかしげた。
「なにやってんの」
「いや別に？」
夏涼は笑ってごまかす。
「それは感謝しなくてはな、ありがとう」
「まあ礼を言われるのは悪い気はしないわね」

信長はすこし恥ずかしそうに頭をかいた。そして二人でクスッと笑った。
「さあ桶狭間へと出陣するわよ！」
信長は右手を上げる。同調したいのは山々だが一つだけ夏涼はやらなくてはいけない事がある。
「あ～その信長さん？」
「なによ」
怒ったような顔した信長が振り向く。この場合夏涼としては振り向いてほしくなかったわけだが。
「あの～服を着替えたいんで、前を向くか、部屋から出ていただいてはくれないか？」
信長はポカーンと口をあけていたが、ようやく意味がわかったようで分かったようで部屋から出ようとした。障子に手をかけたときに後ろを振り向いて言った。
「なんなら手伝ってあげてもいいわよ？」
「バカ」
はっと口をふさぎ顔を横に振った。
（わぁぁ！　あの信長に「バカ」って言っちゃったよ！）
夏涼は目を見開き冷や汗を垂らす。だが信長は夏涼の予想と変わって、ひっこり笑った。
「別にいいわよそんなこと。今のは私が怒られても無理はないし、普通の女の子として接して」
そう言って信長は部屋を出ていく。廊下で信長は「軍議の場所に集合だから」といった。夏涼はその声を聞き、うなずいた。そして一回伸びをした。
「さて、着替えますか」
夏涼は布団の下から制服を出し、着替えて、軍議の場へ向かった。
軍議の場にはもうあの時の四人がいた。四人とも前と同じ服を着ている。あれが戦闘服のようだ。

「夏涼、来たわね。では作戦の最終確認をするわ」
信長が仕切り、作戦の最終確認をする。全員、真剣なまなざしで地図を見つめ、確認する。
「そういえば、今頃で悪いんだけど」
夏涼が手を上げながら言う。みんなが一斉に夏涼を見た。
「これって少人数だよね。でも今川軍は結構人数は多いんだろ？大丈夫なのか？」
「ああ」
勝家が前に出て、夏涼に説明する。
「人数が少ないほど今川軍は油断するからな、そこが狙い目だ。相手は貴族の生まれ、貴族に武は必要ないからな、この少人数でも行ける筈だ」
「……それならこっちの方がいいんじゃないかな？」
夏涼は勝家だけでなくみんなに提案しようと地図の前に出た。勝家は信長に視線を向けた。
「いいわよ、言ってみなさい」
夏涼は頷き提案をし始めた。
「まず、信長本陣の外に簡単な布製の家を作っておいて、本陣には秀吉軍と、利家軍の俺と利家を含まない半分の兵を置く。最初から全軍置くんじゃなくて、ほんとに少人数しか置かずに今川軍を徹底的に油断させる。俺と利家と残りの兵はその家に隠れておくんだ。勝家軍は敵に見つからないような場所に隠れる」
夏涼は地図を指しながら、全員に説明する。幸い誰も抗議をせず聞いてる。夏涼は続けた。
「そして秀吉軍は今川本陣の散策に行く。そして少し危険なんだけど、相手前線に嘘の伝令を流す。『敵本陣には信長しか武将はいない』と」
夏涼は「ここまでいい？」という視線を全員に送る。全員頷いたので、夏涼は続けた。
「相手は貴族だ。そこまでの智将はいない筈だから何も考えず突っ

込んでくるはず。そこが狙い目。本陣に突っ込んできたら、利家、俺達の出番だ」
夏涼は利家を指差す。一瞬ピクッとなった利家だが、すぐ「うむ」と返した。
「俺達は後ろから、突っ込んで来た相手を叩き潰す。すると俺達を倒さまいと相手は結構の量の兵を突撃してくるはずだ。その間、俺達は無理をせず戦う。時間を稼ぐんだ、秀吉軍が帰って来るまでの間を。そして秀吉軍は帰ってき次第、後ろから相手を叩き倒す」
そして夏涼は勝家を指差した。
「そうすれば、相手の大量兵士突撃により、山道の兵が手薄になるはずだ。そこで勝家さんは相手に見つからないように行ってください。あとは作戦通りで、ただ利家は突っ込んで来た兵を倒し次第、砦を落とすという事なんだけど……どうかな？」
夏涼は説明し終わるとみんなを見る。微妙な空気が流れる。
（あれ？　失敗したか？　俺）
夏涼が戸惑っていると　勝家は少々間をとりこう言った。
「うむ、なかなかいいんじゃないか？」
次に利家が笑いながら
「私はこれでもいいと思うぞ」
秀吉は拍手をしながら
「すごいです、夏涼さん！！」
と夏涼をほめたたえた。信長は
「……確かにいいわね。いろいろ危険はあるけど、安全でもあるわね」
と考えた末に頷いた。
「いろいろ試したいしこの夏涼の作戦で行きたいと思うけど、どうかしら」
『異議ありません』
四人が揃って言う。夏涼は嬉しく微笑んだ。
そんな夏涼に勝家が迫り

「それで菅原、嘘の情報を流す役だが……」
話しかけてきた。
「菅原、お前が行けばどうだ？」
「はい？」
（意味が分からんぞ？）
つい声が裏返ってしまった。そこに
「嘉苑もそう思った？」
信長までもが同意する。
「おお、星華様もそう思いましたか」
（ちょっと、利家さん？）
「やっぱりそうですよね～」
（紫陽花ちゃんまで！）
「ということで」
全員が夏涼を見る。そして利家が、夏涼の聞きたくない事を言う。
「満場一致で、貴殿に決定じゃ」
「なんだってぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」
夏涼はは驚いた。「ムンクの叫び」にも負けないぐらいだ。
「そんな危険な役を俺に！？」
「ああそうじゃ」
「天地の使者なのに！？」
「いつもは自信ないとか言ってるくせに、今は使うのね」
「俺、唯一の男なのに！？」
「いやいや菅原、将軍は女ばかりなんだから女が行ったら怪しまれるだろう？　だからこそだ」
「この役、死んじゃうかもしんないのに！？」
「ていうかこれ提案したの、夏涼さんですよね」
全員から一斉に返される。夏涼にもう逃げ場はなかった。
「……よ～し、そこまで言うのならば、この菅原夏涼にドーンと任せておけ！」
「貴殿、声が震えておるぞ？」

利家は嫌みたっぷりに言った。夏涼は声震えていて涙目だった。
だがやるしかなかった。そうと決まれば出陣だった。
「じゃあ行こう！　信長！」
「何で夏涼が仕切ってるのかは分からないけど……向かうわよ！！」
『おおっ！！』
夏涼達は一斉に軍議場を飛び出した。

初陣少始
然事気付
歴史変行
信長行動

第六章　天地の使者とその初陣（後書き）

更新が遅れました。大変申し訳ない。

気を取り直して

「第三回インタビュー」を始めます！！

「今日は、我らが老将、嘉苑こと柴田勝家～！」

「よろしく頼む」

「お？　意外と冷静ですね。さすが老将、落ち着きがあります」

「ああ、まぁ慣れだからな。しかし――」

「さぁそんな老将、勝家さんに質問です」

「うむ、何でも聞いていいぞ、だがその前に――」

「老将、勝家さんの胸は――」

「いや待ってくれ、まずその老将をやめてくれ、けっこう傷つく。あと胸ってどんだけ失礼なんだお前」

「いや～意外とこの質問が多かったんですよ」

「だれからの？」

「ん～？　読者の男性」

「……そうか」

「さて空気が落ち込んだこの時に聞くのもなんですが、実際どうなんですか」

「……ゃく……ンチ」

「はい？」

「１０５センチだ！！」

「まさかのＪカップー！！」

「なんだ、何かおかしいか？」

「いや、予想通りといえばそうですが……」

「なんだ、はっきりしろ」

「……え～それでは時間も来たのでこれで終わりにします。また次

の機会で～」

「あっこら、逃げるな！！」

完

第七章　初の戦と華麗な計略

夏涼、そして信長軍兵士は軍議場を出てすぐの集会場のようなところに集まった。
そこは一番前に朝礼台みたいなのがあってそこに、隊別に並んでいる。利家、勝家、秀吉、あと見たことない顔の女性が二人ほどいたが、彼女たちはその台の横に並んでいる。きっと隊を率いる将としての別枠みたいなものだろう。
勝家は全員が集まったのを確認して「静粛に！！」と叫ぶ。続けて、「本日の総大将の信長様から、激励をいただく！　静かに、されど熱い気持ちを持って聞のじゃぞ！！」
『おおっ！』
利家が兵士の檄を飛ばし、隊全体の気が引き締まった。それは夏涼も同じだった。ていうかそれどころではなかった。
（やべぇよ、初陣だよ……さっきテンパちゃってへんな案出して、通って、大丈夫なのか？）
歴史上でいけば桶狭間の戦いといえば結構重要な戦いだったはずだった。それなのに自分のへんな意見が通ってよかったのか？　そう思うと頭痛がしてきた。
テンパっていた夏涼の理性を取り戻したのは、台に上る信長の足音だった。
信長は上がり終えると、兵を見降ろした。その姿が妙に威厳があり、兵士一人ひとりの気が先ほどより引き締まる。
「今回の敵は誇り高き貴族、今川家よ。でもこの時代、誇りなんてものはいらないわ。いるのは強さ、兵、そして隊長武将、君主への忠義心よ！！」
叫ぶ信長は、いつもの雰囲気とはどこか違う、「熱さ」があった。

そして夏涼はそんな信長に見惚れている自分がいることに気付いた。
（あぁ、信長って本当にすごいんだな……）
夏涼は心底そう思った。信長は激励のラストスパートをかける。
「相手は、貴族。忠義を失い、欲望だけに目がくらんでいる人間。そんな人間の誇りを軽く崩し！　そして最高の絶望を味あわせてあげましょう！！」
『おおーーーーっ！！』
一瞬の時の声。されどそれは、地面を揺るがし、水に波を与えたであろう。それほど信長の激励はすごかった。夏涼も心底感動した。これで部隊の士気も上がるというものだったが、これで終わりではなかった。
「ああ、それと」
台を下りようとしていた信長が、振り返って話し始める。
「なんでも、近頃噂になっている天地の使者なる男がこの中に紛れ込んでいるそうよ」
兵士たちがざわつき始めた。だが心の中がさらにざわついている男が一人。
（あれ？　信長さん？　俺の事忘れてません？）
夏涼は一人、誰よりも動揺していた。とっさに利家たちを見る。すると、
（あれ？　うなずいてらっしゃる）
夏涼はさらに混乱。しかし信長は続ける。
「我こそは天地の使者だというものは、この中で一番の手柄を立ててきなさい。そうすれば天地の使者だと認め、隊の長武将にして、その他いろいろ優遇するわ」
兵士たちは周りの目を合わせそれから、
『おおおおおおおおおおおおおおっ！！』
時の叫び。そのあともざわざわとしていた。
「それじゃあ、頑張ってちょうだい」
と不敵な笑みを浮かべて、台を下りた。それを確認して、秀吉が

号令を出す。
「では、みなさん隊長武将の元へ行き、今回の作戦を確認してください！」
その号令に合わせ、ざわつきながらも隊長武将の元へ散る。そんな中一人立ちつくす夏涼。そして急に走り出し、利家の肩をつかんだ。
「え？　え？　あれどゆこと？　てかなんで利家たち頷いてんの？」
夏涼は半分泣き目になりながら訴えた。
「うっう～、なぜと言われてものぉ」
利家は反応に困った。あまり説明というのは好きではないからだ。そこをちょうど勝家が通り過ぎたため、勝家に助けを求めた。
「嘉苑～貴殿をどうにかしてくれ」
勝家も甘えるような声を出す利家をほっとくわけにもいかず、夏涼に話しかける。
「どうした、菅原」
「なして？　なして信長はあんなことを言ったんだ」
「日本語がおかしいぞ菅原。……そうか、説明する必要があるか」
半泣きの夏涼をほっとくわけにはいかないので、勝家は周りに悟られぬようなるべく小さい声で話した。
「菅原、この世界で天地の使者とはどのような存在だ？」
不意な問いかけに夏涼は身震いをした。そして、勝家と同じぐらいの声で話す。
「え～と、この地を治める……英雄的な人？」
「おお、自分で言ったな。まぁいい、確かにそうだ。それで、天地の使者になるということは？」
「……信長も言っていたけど、いろいろ優遇されて……何より勝家さんや美人の人達と知り合いになれたな、そこが一番うれしい」
「っ！！　こらそのようなことを言うな！」
「？」
勝家は夏涼の一言に顔を赤くした。しかし夏涼は赤くされるよう

な発言はした覚えがなく首をかしげた。勝家は咳払いして進める。
「まっまあ、そういうこともあるな。さらに隊長将軍にもなれる。そこで質問だ菅原、お前だったら天地の使者になりたいか？」
「まぁ、まだ俺も実感ないからわかんないけど、なってよかったって思うときはあるから、なりたいと思うよ」
「だろう？　だからその人としての欲望心をくすぐったわけだ。そうすれば、我先にと士気も上がるし、手柄も多くなり、戦に有利になる、そういうことだ」
「……おお！　なるほど！」
夏涼はやっと納得した。
（まさか……そんな計略があったなんて、本当にすごいな信長……でもまって？）
「あのさ、勝家さん」
「勝家でいい、そのくらいは当然だ、天地の使者」
（いや、なんか言ったら怒られそうなんだけどな～）
「じゃあ、勝家」
「ん？」
今の話の中で一番夏涼が気になったことがあった。それは……
「俺より手柄を立てた兵士がいたとしたら、俺どうなるの？」
「……」
黙り込む勝家。その様子を見て、またも半泣きしてしまいそうになる夏涼。勝家はため息をつき、夏涼の肩に手を載せた。
「星華様は、時には冷酷非道。力のないものは切り捨てていくお方だ」
（えええええええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！）
勝家は夏涼の背中を軽く叩いた。が、勝家の言葉がよほどショックだったらしく足腰に力が入っていなかった。なので膝から落ちそうになったが、なんとか踏ん張った。
（俺、どうしよう）
なんか夏涼だけ士気が下がりまくった。

戦開始まで、あと三十分――

戦の準備は夏涼の言った通り進んでいた。本陣付近にさりげなく布製のテントのようなものが置かれ、利家軍の利家を含む半分はそのテントの中に隠れた。後の半分と秀吉軍はそのまま本陣に待機している。

勝家軍はいつでも奇襲ができるように、秀吉が散策に使う山道の近くに身を潜めている。

夏涼はいつでも偽の伝令をいつでも出せるように利家のいるテントにすぐ横に今川軍の戦衣に似た服を着て準備をしている。

準備自体はほとんど終わっているようなものだった。しかし夏涼の心の準備は一向に終わらなかった。

（やばい……心臓が、止まらない！　いや止まったら困るけど！落ち着け……いいから落ち着け……まてよ？）

夏涼は落ち着くために、今日の作戦を整理した。が、その時、一つ思い出した。

（あれ？　俺のいた日本の桶狭間の戦いって……）

夏涼は気づいてはいけないことに気づいてしまった。

（信長の奇襲で勝つんじゃなかたっけ！？）

桶狭間の戦いは信長が今川軍本陣に奇襲して勝利した戦いだった。

（何やってんだぁぁぁぁぁぁ！！　俺よっ！！！！！）

夏涼は自分の出した策により、歴史が変わってしまうことを恐れた。頭を抱え地面にころげまわる。ただひたすらに自分のやったことに後悔した。

（何を転げ回っとるんじゃ、貴殿……）

とテントの隙間から見ていた利家は思ったが、ほおっておいた。

（何か楽しそうですね、夏涼さん）

と秀吉は間違っていることを考えている。
（はぁ～先ほどの言葉がそんなに怖かったか）
と勝家も間違っていた。
（だぁぁぁぁぁぁ！！　これじゃあ今川に堂々と宣戦布告してるようなもんだぁぁぁぁ！！）
夏涼はもう収拾がつかなかった。

今川軍も信長軍に気付いていた。そのため今川軍総大将、「今川義元」は数千の軍を出した。前線に朝比奈秦朝、中線に鵜殿長照、砦に岡部元信を配置した。
（ふふふ、今日こそ生意気小娘、信長の首を取って見せますわ）
「おーほっほっほっほっほっほ」
義元は顔に手を添え、高笑いした。
その後ろで、暗闇に隠れた顔がゆっくりと笑った。

信長軍は全ての準備が整ったため、作戦に移った。
「星華様、これより我が秀吉軍、今川軍本陣詮索の任を果たしてまいります」
「了解よ、相手に悟られず慎重にね」
「承知」
秀吉は信長の前に膝をつき出発の許可を得た。「承知」というのは、指示に対する返し言葉で「了解」などの意味を持っている。
「ではこれより今川軍本陣詮索に行きます。秀吉軍はついてきてください！！」
『応っ！』
秀吉の掛け声とともに総勢百人ほどの詮索部隊が行動を開始した。
「応」は承知と同じ意味を持つが、応は兵士用、承知は武将用と区別がされている。
秀吉軍はすばやく山道に消えて行った。
「……ってもう俺の出番か」

今の夏涼は緊張と死との狭間で押しつぶされそうになっていた。
その様子を見かねた信長は夏涼を自分の元へ呼んだ。
「夏涼、やけに緊張しているようね」
「そりゃそうだろ、死ぬかもしれないんだぞ？」
泣きそうな夏涼の様子を見て、信長は吹き出しそうになった。
「何笑ってんのさ！」
「だって、夏涼面白いんだもん、あはははっ！」
「もう、笑うなよ」
「あははっごめんなさい」
それでも信長は笑いをこらえれなかった。
「まったく……でも」
「なに？」
信長は聞き返した。夏涼は照れ臭そうに頭をかく。
「なんか緊張がとれたよ」
「そう？　ならよかった」
信長は、緊張がほぐれた夏涼の背中を思い切りたたいた。
「おおうっ！？」
夏涼は前につんのめって倒れそうになったが何とかこらえる。
「さぁ、頑張ってらっしゃい。骨は拾ってあげるから」
「それ、洒落になんないぞ」
それでも気分が入れ替えれた夏涼は「ありがとう」とだけ信長に言い、もとに場所に戻った。
（ふふ、面白くなってきたわね）
信長は一人、ほくそ笑んだ。

第七章　初の戦と華麗な計略（後書き）

もう死にたい……と思うほど更新遅れました。…あっ目の端に涙が、

…

…

きっ気を取り直して、インタビューのコーナー！！

「今日は、我らが主人公、菅原夏涼さんでーす」

「よっよろしく」

「……死ねばいいのに」

「なっ！　今言っちゃいけない言葉を！！」

「そんなに緊張しなくていいですよ……リア充め、地獄に堕ちろ」

「なんで！？　なんでそんなに恨まれなきゃいけないんですか！」

「実際リア充じゃねえかよ！　糞が！！」

「わぁぁぁぁっ！　とうとう本性現した！！」

「俺の嫁の利家とイチャイチャしやがって！」

「何の話ですか！！」

「作者が一番好きなキャラが利家なんだよ！　ミジンコ！！」

「もうＭＣじゃないっこの人！！」

「あわわ……チ〇コもげろ」

「なぜ、雛里ちゃん風！？　そしてそのチョイスはトラウマになる！！」

「ということで、全人類共通の敵、夏涼さんでした～」

「何一つインタビューじゃなく終わった！！」

「うるさいな、邪魔だ！　さっさと逝け！！」

「漢字が違う！！　……結局けなされて終わったな。俺のターン」

夏涼の走りとアホの朝比奈

夏涼は走った。この作戦を果たすために、みんなの期待を裏切らないために。

（俺が、絶対にこの策を成功させる！！）

夏涼の額から汗がにじみ出る。勝家が言っていた言葉が浮かんだ。

（相手の前線、朝比奈秦朝を見事にだますのが今回の戦の鍵だ。しっかり頼むぞ）

夏涼は恐怖から震える手を握り締めた。

（そうだ、これがこの戦の勝敗を決める！！）

まだ怖い。悪夢が脳裏をよぎる。だがみんなへの心が、恐怖を凌駕した。

狙うは、朝比奈秦朝。

前線の秦朝はいつまでたっても襲ってこない信長軍に油断しきり、先ほど戦が始まる前に、農民からもらった酒を飲んでいた。

（はぁ～酒はうまいんだけど、なんか物足りないわね。あとここに美青年でもいればいいんだけど）

なんて思っていた矢先、一人の兵士が自分の馬下に飛び込んできた。

「はぁはぁ、でっ伝令です！！　……秦朝様」

「何事……！」

秦朝はその顔を見て頷いた。

（あらっ！！　いい美青年じゃない）
秦朝はまたも頷いた。

（なんだこいつ、何度も頷きやがって。てかやっぱ遠いわここ。疲れた）
夏涼は途切れる息を整えながら頭をかしげ思った。この馬に乗っている女性、秦朝は何度も夏涼を見て頷く。何か嫌な予感がしたので、夏涼は早め早めに作戦を遂行させる事にした。
「伝令です。敵、信長軍は、一個小隊が動き出しました。そこには武将、羽柴秀吉がいる模様」
「ふんふん、それで？」
秦朝はこの伝令が敵だということに気付いていなかった。夏涼はつづけた。
「確認したところ、この戦に武将は秀吉しかいないようでした。なので」
「ふんふん、なので？」
秦朝は本当に気付いていない。そして夏涼は一番言いたかったことを伝える。
「敵本陣に武将は、信長しかいません！」
「おお！」
秦朝は感嘆の声を出した。夏涼は追撃をした。
「……手柄を立てるいい機会です」
「ふん、そうね。信長をヤッちゃえば、危険要素も消えるし、手柄も立てれて一石二鳥ってわけね」
夏涼はほっと一息ついた。ばれずに出来たことにひどく安心していた。
その夏涼の行動を見た秦朝は疑問に思った。
「あら、そんなにも安心するのかしら？」
「！」
（しまった、気を抜きすぎた！！）

「いっいえ、その新人なもので、つい緊張を。それに」
「それに？」
夏涼は不本意ながらも言うしかなかった。
「秦朝様に会うの初めてでしたから」
（くそぉ、自分でも何言ってんだ！）
夏涼は、ばれてしまったと思いこんだ。……信長の形相が目に浮かんだ。
「！……ふふ、いいわね、あなた」
「はい？」
夏涼は驚きの発言に情けない声を出してしまった。
「いいわ、ずっとここにおいてあげる、さぁ杓しなさい」
「え？　あっはい……」
夏涼は一瞬戸惑ったが、これも策の為と思い酒びんをとり、杓した。
（んふふふ、これよこれ）
と秦朝は思い、
（なんで俺がこんなこと）
と夏涼は思った。
「さて、あなたの言う通り、ここが勝機ね。一気に攻め込みましょう。いくわよ！！」
『おおおおおおお！！』
なんだかんだで夏涼の作戦は成功し、朝比奈秦朝軍は、信長本陣に向かって突撃をした。

「前方に砂塵あり！　旗は赤鳥！　朝比奈軍です！」
一人の兵が信長の元に走り、事を伝えた。
信長はすこし考えたのち、ニヤリと微笑んだ。
「全軍！　欲望に目がくるんだ獣を軽くいなすわよ！　全員抜刀！」
信長の号令でこの場にいる兵士全員が刀を抜いた。

「全力で迎撃するわ！　……よし！　かかれ！」
「おおおおおおぉぉぉぉ！」
突っ込んできた朝比奈軍と信長軍が戦闘を始めた。
上手い事に、信長はゆっくりと兵士を後退させ、利家たちが攻めやすいように間合いを確保した。
夏涼は秦朝の隣に攻める直後はいたものの、すぐに布製の家に入る。
「利家、今が攻め時だ。行くぞ！」
「言われなくとも分かっておるわ！」
利家は利家軍に合図を送った。合図を受け取った兵士たちは一斉に飛び出し、朝比奈軍の後方から噛みついた。
朝比奈軍は虚を突かれ、兵士の顔には混乱の色が見えた。
（ちょっとぉ、信長しかいないなんて嘘じゃなぁい）
秦朝も何が何だかわからない状況だった。
（どこ行ったのよぉ、あの美少年～）
馬を操作しながら辺りを見回すと、刀を使わず、格闘で自軍兵を倒している夏涼を見つけた。
（きぃぃぃぃぃ！　謀ったわねぇ！　あの子許さないんだから！）
だが、前曲、後曲が崩れた今、どうすることもできなかった。
混乱の色は夏涼たちの予想よりはるかに大きく、秀吉軍を待つまでもなく、朝比奈軍は壊滅し秦朝は敗走した。
夏涼はガッツポーズをした。作戦通りにはいかなかったものの、自分の策が有効に動いたことは、とても感動した……が
「まだ勝っていないんだから、喜ぶのは早いわよ？」
「そうじゃ、勝った気でいると足元をすくわれるぞ」
信長、利家にダメ出しを貰い、少し気分が落ち込んだ。
しかしなにわともあれ、前線の朝比奈軍を敗走させたのは大きい。
信長は、すこし夏涼を認めていた。

夏涼の走りとアホの朝比奈（後書き）

……もう、なにも言いますまい
（→土下座している俺）

インタビューのコーナー！！
「今日は我らが君主、星華こと信長さんでーす！」
「よろしく」
「いや～信長さん、最近夏涼にデレてきているというか、買ってますねぇ」
「デレ？　なんだかよくわからないけど、夏涼の腕は買ってるわ」
「ほほう？　それはどんなことで？」
「まず、あの中国拳法とか言うあれ。そしてなかなかキレる頭。さすが天地の使者といったところかしら」
「なるほど、……話は変わりますけど、信長さん、胸大きくしたいと思いません？」
「何をいきなり、そんな事私は考えないわ」
「そうですか～、確かになんか信長さんは貧乳だから信長さん！みたいなところありますもんね」
「なんか引っかかるいい方よね、まぁいいわ」
「おっと、もう時間だ！　それではまた次のお話で～」

全然オチが見えなかったんで、無理やり終わらせましたｗｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3047m/

乙女大戦　～戦国美将伝～

2011年1月1日19時40分発行